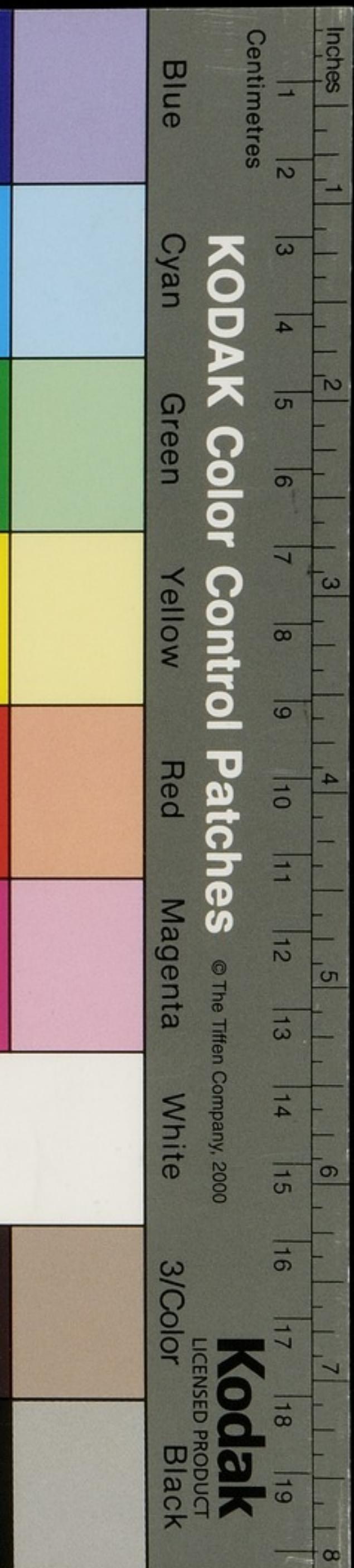
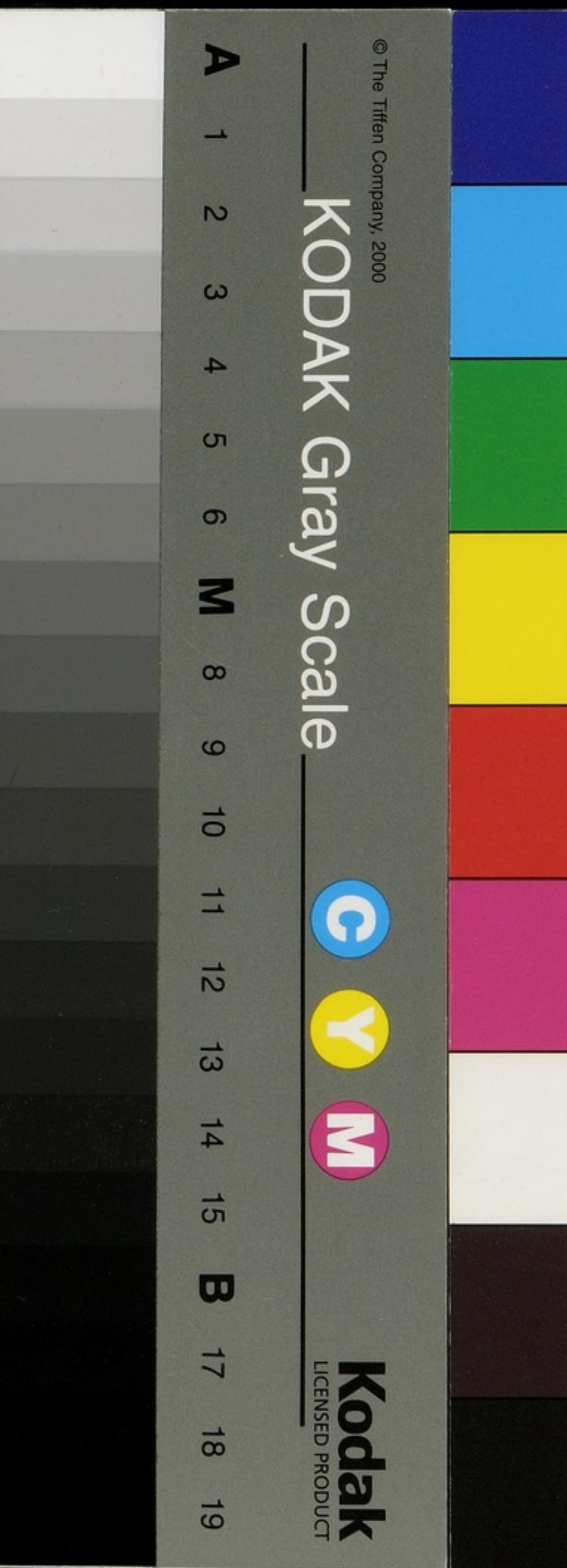


『椿說弓張月』殘編五





鎮西八郎 椿說弓張月殘編卷之五
為朝父傳

東都 曲亭主人編次

第六十七回

芭苴を憐て王女寂を示す
童謡を聴て為朝別を決す

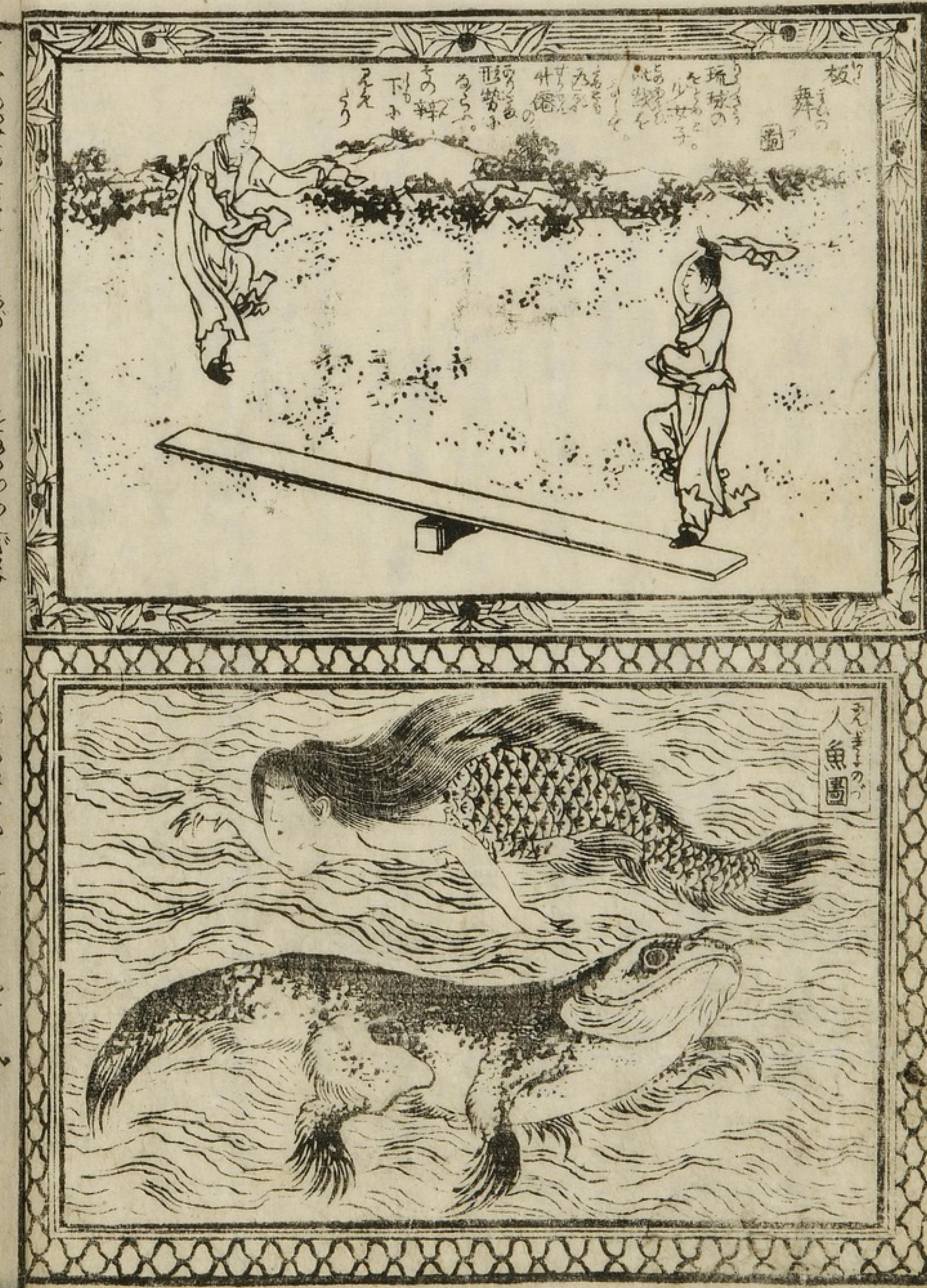
安徳天皇の壽永二年癸卯の夏四月。為朝父子の武徳ふよき。
牒雲首が授て後ハ三首そぐて無事なり。されどこの國ム王位
いすゞ定づられハ。松寿紀平治ホの功臣。又ハさうらし。かたに賤夫山児ホ
まとい。形なくおひの行。亦五六年の春秋を経て。大日本ム。平家
既ニ滅亡。後鳥羽院の世を御。文治三年とひ春の比。琉球属島
の酋長林太夫ハ。年首の拜賀のあ。大里中城浦添へ。あり。泊の
客館。又延年。年未。諸處の貢物ハ。為朝を。もう。八町龜。も。仰て。

る龍宮城の宝庫へ收に。一もとりまふとえりしへ。有日泊の漁翁
ホ林太夫が客館へ来てひきまう。つる浦人ハ世この國王へ供御の赤目魚を
獻らしむる。今み子ハこれをぞ信ゆちとやげき。變化の際雲
を亡うせて國ハ豊ふ民ハ肥。以てよもたらすまうて平民かのく業を
樂。妻子を安ぐに養ふと。み足八郎君ちん親子の御威徳お
よせば。この詔びをすまうとんとんとひきまう。推進のよどぎのみれ。か
の外よ夥の年月が正しゆひた。あすねふ。今曉の網引舟ふ。ひとと寄る
人魚を獲る。傳々く。倘人ありて人魚の肉を一トとび喫へば。その人の
壽命彊りしとがん。こへづる私ふぞれぬやうが只速。か大里へ献
らへべうち。太夫ハ國ふ大功あり。且夥の属嶋と管領となれば。
漁獵うへ。こうのゆをゆきだよ。五呂骨の舟。このよとび
まもる

くんや。と信ゆかうらからへバ林太夫坐て。ゆく。あ心操を稱嘆し。
一絆ゆも及ぶとして快く謹ひ。もう漁戸ホ詔び。件の人魚を苞苴
として大里へ齎し。林を失さず裡より入りて。縁由をあわふ。まうに
と叮嚀。為朝ハほくぐどうちやて微笑し。人の餌せあく年と積て懶
なく。養生ともなふめ。縱人魚の肉を食ふ。只一日の餌。あはりて。
長壽ゆ。さんと。有うじ泊の漁夫あう心操。いしも賞をとへた。ゆされ
ども。それ國王ふあふざれ。ひとり放よ受ふ。もしく中城へりて。まふ
ぞ。と仰。かば林太夫罷まきて。その旨を傳ふ。漁戸ホちく。及ばず。
あく手を失ひつ。亦ちるくと。中城へおとつ毛國鶴落。つま
越をゆえ。かば王女も入られを受ふ。それが八郎按司の妻。ま
大里ふ。ふ。受ふ。なと。あくへ進じよ。おひもうけねこと
おきまきこ

こそ。かく推逐にしまひふ漁戸ホせんとぞかく。亦浦添へり。そ
ま。あり。八町砾ふうち歎て縁由をやえゆづ。舜天たるを彼入魚つ。
ほとうへも寄はしまひ。家君北堂受たり。この芭苴を舜天たる
まことて受るやうやあれ。ゆくとび大里へ進じて。さほ受ありべて中城へ
進むること。時宜ふも稱へ予うあることにあふじて叶囃よ説喻に
推返す。ひかが漁戸ホと進退空す。せんかせんとううち譚へす。
までまのまじき。舜天丸の室ふ正理なれば已と。ひとひど。亦大里へあんと。中城まで
立つ。お役ふ箇所の往還ふ。五六日を経より頃。も夏の日の炎暑
ふ。お嬢を人魚。既よ腐爛。臭氣。鼻を向。こひいふせんと。卑れ
果。人魚を道次ふ捨て。衆うち泣て。かうりけ。舜天丸ハ漁戸ホと推
返す。目して。亦紀平治を亞ひて。すまゆう泊の浦人。人魚を獲て長生

不老の謂葉と稱して大里へ獻されども。父絶て受ありと中城川經く
亦こゝへりて多々勞苦の苦心いと憐じべれども。人魚と原本草に
哉せ。但山海經卷之二 丹水へ東南を流れ。洛水が注ぎ。その中ふ
水玉多く人魚多し。注よ鱗魚の如くにして四脚あり。圖 又臨海
异物志潛確類書 人魚の人魚似長三人。噉べてとしく。又
集異記。決水ハ龍侯山より出で東流して河が注ぐ。中に人魚多う。
その状鱗魚の如く。四足あり。その音眼女児の如く。食へば痴疾也。或へば
人魚ハ即観なり。鄭姓 似く四足あり。小児の啼が如く。今亦鄭族多々鱗
人魚也 ト。又徂異記。侍制職名 檀道姓 といふ。の使と奉
う。と。高麗へ赴く。沙中に一の婦人をすらふ。紅裳也 て雙足。又髻鬟
紛乱せ。肘の後。微一紅鬚あり。査道從者 て扶て水中へ入る。そ



拜手感忠して没うる乃人魚ことひア。又稽神錄小謝仲玉といふ。婦人の波中より出没を経てスカクに腰以下ハのみ魚なり。とリテ。諸説かくの如くと以テ世俗の稱それどく人魚を喫ひく長壽するはを見る所み實也。不老の仙丹たりせば。舜天丸びくら調理して。家母よ進くせざくらんや。君子の時ならぬ物を食せど。況て異物を嗜むと云し。世俗の説ア侍ると。今更信ぞべくぶんとりとも。但公私となつて。今故なしくして海濱小異形の魚を生きて。吉凶をひ定めぐに。彼人魚の形をこれば。腰以上ハ婦人か似たり。痛くたれ。先妣ハ波の底小身を投げて。ちや十餘年が経たひね。ナレを今彼人魚をえらも。先妣のゆいと。ゆくじ。頃日ハ事ハ紛りて中城へゆりとあらず。王女の起居を伺ひべた。准候せよと。宮へ。紀平治以下の近習を訪て中城へと詣だる。是より

さん為朝ノ泊の浦人を推々へとひきれ次ノ日越えよりらるべと陶
せうめま。松寿^{アシテ}人魚のふと笑えあじて亦宣^{アシテ}す。され既^{アシテ}浦人^{アシテ}お^{アシテ}芭苴^{アシテ}を受^{アシテ}ざれハ王女もあれを受^{アシテ}ざ。王女受^{アシテ}浦人^{アシテ}お^{アシテ}浦添へ
りてゆえん候^{アシテ}あうりとも舜天丸^{アシテ}彼芭苴^{アシテ}を受^{アシテ}べにや^{アシテ}かく^{アシテ}路次^{アシテ}の往還
不煩^{アシテ}彼浦人^{アシテ}ホ^{アシテ}因^{アシテ}をおりひ惠^{アシテ}を謝^{アシテ}芭苴^{アシテ}を推^{アシテ}返^{アシテ}そのとす。で
彼ホ^{アシテ}いざ^{アシテ}苦^{アシテ}へ豈^{アシテ}痛^{アシテ}ひだる^{アシテ}。や直^{アシテ}小中城^{アシテ}赴^{アシテ}て便宜^{アシテ}就^{アシテ}
利害^{アシテ}を脱^{アシテ}き王女^{アシテ}お^{アシテ}中山王^{アシテ}の位^{アシテ}を定^{アシテ}むべうあり。す。陶按同^{アシテ}も
りう^{アシテ}すもにいあたり^{アシテ}ど宣^{アシテ}。松寿^{アシテ}へも^{アシテ}りへ^{アシテ}。二回答^{アシテ}まうせ^{アシテ}をある翁
そもひち^{アシテ}吉日^{アシテ}大里^{アシテ}の城^{アシテ}を生^{アシテ}。松寿^{アシテ}と伴^{アシテ}。後者^{アシテ}を^{アシテ}て馬^{アシテ}の足搔^{アシテ}をもや
け^{アシテ}。次の日中城^{アシテ}へ到^{アシテ}。由^{アシテ}ふ。王女^{アシテ}へかく^{アシテ}とめあうたまう^{アシテ}。と芭苴^{アシテ}の人魚
腐^{アシテ}。浦人^{アシテ}いよいよ^{アシテ}本意^{アシテ}を失^{アシテ}。ゆくもゆくせ^{アシテ}とみゆきう^{アシテ}。もようも鬱^{アシテ}
はしを傳^{アシテ}。只^{アシテ}顧^{アシテ}ふ歎息^{アシテ}。道^{アシテ}あれ世^{アシテ}の道^{アシテ}を志^{アシテ}。賤民^{アシテ}淳朴^{アシテ}。
忠信^{アシテ}の志^{アシテ}。篤^{アシテ}と^{アシテ}り。國^{アシテ}王^{アシテ}なづれば彼ホ^{アシテ}も其^{アシテ}手^{アシテ}を失^{アシテ}。むし^{アシテ}應^{アシテ}神
天皇^{アシテ}の崩御^{アシテ}。二^{アシテ}の皇^{アシテ}子^{アシテ}と^{アシテ}は^{アシテ}と^{アシテ}王^{アシテ}子^{アシテ}のあく^{アシテ}名^{アシテ}。
鬼道稚^{アシテ}郎^{アシテ}子^{アシテ}尊^{アシテ}と^{アシテ}。跡^{アシテ}王^{アシテ}子^{アシテ}のもの名^{アシテ}を^{アシテ}大鷦鷯^{アシテ}尊^{アシテ}と^{アシテ}。同胞
位^{アシテ}を讓^{アシテ}。夥^{アシテ}の年^{アシテ}を経^{アシテ}。ゆりゆくも今^{アシテ}そ^{アシテ}お^{アシテ}。ゆくも^{アシテ}あひて
かくとも難波^{アシテ}の浦^{アシテ}宮柱^{アシテ}かくして建^{アシテ}仁德^{アシテ}の聖^{アシテ}の王^{アシテ}の威德^{アシテ}を仰
げ^{アシテ}。高津^{アシテ}の百石城^{アシテ}。お^{アシテ}が^{アシテ}ぞく^{アシテ}ゆく^{アシテ}称^{アシテ}。も愁^{アシテ}外尚寧^{アシテ}王^{アシテ}の嫡^{アシテ}女^{アシテ}と
其^{アシテ}稱^{アシテ}。されば^{アシテ}ひとの故^{アシテ}をりて。年^{アシテ}事^{アシテ}位^{アシテ}を空^{アシテ}して。この國民^{アシテ}を苦^{アシテ}り
ラ^{アシテ}もかく^{アシテ}ハ即^{アシテ}按^{アシテ}司^{アシテ}。すく^{アシテ}て王^{アシテ}位^{アシテ}即^{アシテ}ま^{アシテ}し。民^{アシテ}の^{アシテ}工^{アシテ}と果^{アシテ}
を^{アシテ}うる^{アシテ}。お^{アシテ}きと^{アシテ}を^{アシテ}。あく^{アシテ}きうを^{アシテ}。^{アシテ}に^{アシテ}持^{アシテ}へ大里^{アシテ}へ走^{アシテ}。芭苴^{アシテ}の魚^{アシテ}へな^{アシテ}きて。浦人^{アシテ}本^{アシテ}も歎^{アシテ}。縁^{アシテ}由
を^{アシテ}えあ^{アシテ}。つぶおり^{アシテ}行^{アシテ}をま^{アシテ}せと。只^{アシテ}管^{アシテ}いそ^{アシテ}じたま^{アシテ}。もじり。浩^{アシテ}處^{アシテ}

ゆるされし良人を惜た。子を閑て白縫が。まづみの國よ王、るぎだ
とぞうりにて證据なづく。その疑ひへ解がけん。僕れべ十あまり。二タ
とせといへ前つ梶安元二年九月二日。佞臣利勇が下知よも。ひそ
聚ふ悪少年ホガ寧玉女を殺すとて山里近く越えの石橋。まづりあ
まつる。ち、
とぞ真鶴が雄く。た動た物をせん。敵へ多勢を共ちく。真跡遂
せられし。一人の悪少年。王女の頭髪を搔廻して退す。みじかめ。
一人ハ効を因して。王女の胸前までと刺。灸所。それば即ち堪らず立地不
緯あり。その空蝉の裳脱の殻へ白縫が魂入りて。悪少年ホヤ砍らじ。
種この艱苦を経どり。終は丈夫ふ環會。ふふ子よ再會。く。
志をひいた。疑ふ。これ見えまへといひ。襟ふ左左
うたふき。今刺されど。太刀残乳の下。うり背へうけ。さと
潰す鮮血と。もふ一道の白氣立ち。空中へ入ると見え。王女の
撲地と輾轉て朽木の花と。うり。オカされ果て。怪一け。と。乃朝
主役これをとて。とくい。う。こぞうに。枚ふ。へもあ。されば。只うち
まづりて。せしき。と。中。天丸。裳脱の殻を抱き起。喃母君。世
ふ在と。限。あれ。命。う。も。魂の人。ふ。懸て。神。あ。び。や。な。段
ひ。う。でも。土。ふ。在。と。ひ。う。の。孝。娘。を。よ。ど。て。盡。さ。し。う。ご。南。の
嶺。よ。う。浪。も。ゆ。う。と。い。が。魂。の。ゆ。う。び。あ。ふ。立。う。人の。こ。く。死。を
慰。り。う。や。よ。啼。母。君。母。君。と。声。代。う。う。の。招。魂。ひ。孝。子。の。哀。傷。推。量。り。
衆。皆。被。を。濡。と。あ。そ。為。朝。頻。お。嗟。嘆。う。舜。天丸。が。悲。れ。と。理。り。ふ。過
されども。死。て。久。れ。白。縫。が。け。か。ま。と。あ。ゆ。め。し。る。未。曾。有。の。幸。う。め。
や。物。も。必。因。あ。り。果。な。り。む。お。お。女。と。あ。く。歎。く。も。魂。い。う。そ。復。う。べき。

貞魂体とすゑ
秋蟬殼とすむ



母の魂天かゆりて。王女の軀をとどめられは。骸をもん身が母よあひ。尚寧王の嫡女にして。則國の母子あり。まやく國王に擬へて廟岡へ送る。惜い。舟天孫氏の正嫡をもや絶す。おも縁葬のこととなりそぞ。毛圓鶴木こもろばよ。叮々諭しまへ舜天をハ理つある。父の辞よ禁よ。と。ちどりうし袖の露ふは。沈みてせしむ。かくてあきなふあゆる。衆皆これを慰め。王女の亡骸をさうりあきらは。生れが如死の。眼前よ枯朽て。白骨のくも残アシカレ。現ニ寧王女ハ蟄れちひて。十年あまりを経ふけれど。白縕の神冥合體して。舊の形みて在せたり。と人みゆきじく。曉う。さればこの一條の大奇談を。遙よ傳へ。ゆく樵夫漁戸木まで。あのも。ひりたも。或ハ王女の恩澤がもじひ。或ハ白縕の心烈を痛。一。潜然として語り續ふ。耳を側まし。かく。送葬のみ果ふ。ければ舜天丸ハ浦添より。七日毎小廟奉て。のうち月日もとを。夏去秋深。九月の比より。降そぐ霖雨。富翁河の堤崩れて。農夫ハ畔倒の便を失ひ。旅客の道を去ゆべざる。その訴めしき。件の傍を築せん。為朝みづく。大里より。佐敷西原越えの間切を巡歴。松寿も又城を出。郷導は。かくて。朝の富翁河。赴んで役丁を興し。金武の奥松よ。堤の修復を。そじ。まゆ。彼此の村民。木。石。土。群々。水を堰。土を運び。日々。まゆ。一隊の童子。木。石。土。を徘徊して。神人來兮。富藏水清。神人遊兮。白沙化水。と縦ひけり。乃朝へこれを支て。大里へ。ゆり。と。やがて浦添の城下

入りて舜天丸より對面。富春江の堤のゆゑと云ふ物よりしてさて富ふ
やう。はじめこれより漂泊して比南風原へ赴くとて富春江を打渡る
ふ。河の畔ふ童子木娶ひて神人未だ云々と謡ひきある。今茲為翁
が。ゆうび彼處へ赴けば又童子が謡ふと當初ふ異ゆづ。こふかさゆ
て童謡の末歴を推量せん。それ前つ年巴麻鳴よ神仙を訪ひとれ。
仙童がりふることあり。今より六年を経て八頭山に登れば師の彼山の
巔す行まくんこもふ記して高る。と教へとせらひされば今へもや時
到ね。これより直^まは頭山へ赴く。神仙は見ゆる。ひくい。げんきん
りうちもに登山して道顔不咫尺^{せき}。因心東心を拜謝^{しめ}。後の吉凶を問ひ
きんか。と寢入^む。舜天丸の眉うち頻^{ひそ}。す。仰ふ付れども。昨夜の夢
の何となる。ゆよかにて付るなり。壁^{かべ}が南山ふ高木あり。その木忽地地を
もあれて。天へ升るとゆふと。との吉凶をとね。むし周公旦のもくと
伯禽^{きん}と。もくすの庚叔^{こうじゆ}と。りうともに周公^{しゆこう}を見えある。ことび^{まき}えて三
とび^{まき}。若れまひけり。その意をゆく。高子と。りありのと
なまえ。高子と。りあら。教てりゆ。南山^{さんざん}。橋梓^{きょうし}と唱る二木^み。ゆくて
み記す。とひ^{まき}。二子^{ふたご}うちうちられ^{まわ}。南山^{さんざん}。起^{おき}つ。橋梓^{きょうし}
二木^みを視^み。橋木^{きょうぎ}を高くして。その木を仰^あぐ。梓木^{ひづき}を
俯^ふれが^{まわ}。立^たててそのは^{まわ}。ゆがて高子^{たかこ}に告^{まわ}。高子^{たかこ}うつ島^{しま}
そ。橋木^{きょうぎ}へ仰^あぐ。高^{たか}。それ則父の道^{みち}。梓木^{ひづき}へ俯^ふして實^{じつ}。も^と。あれ則
子の道^{みち}。汝達父子の道^{みち}。この故^{ゆゑ}公^{こう}はれ^{まわ}。と叮嚀^{のめい}。よ説^{せつ}。愈
せば。伯禽^{きん}庚叔^{こうじゆ}と。じゆて曉^ありて。又周公^{しゆこう}も見えり。あ。愛敬礼濃悉^{ごん}
子^この道^{みち}。周公^{しゆこう}詎^ひまくとぞ。かれが父の道^{みち}を^{まわ}。

南山の高木が地をとてて。天が升るとゆゑにして。山からて快く。や
八頭山より登りて彼神仙を訪ねて。時もあらず。且く足ひひそま
り。と辭を盡して練なりへば。あるる呵とうち笑ひ。ありと別れ
みる天機め。され今八頭山へ到らざる。命歟とふ竭んす。かくよく
畠んや。夫國と游る。人の人をあすを勢力とし。よく人をあむとて。又
よく人を用ることあり。よく人を用うとれ。奸邪遠ざれ。達云入じだ。こが
才へあん身ふ及ばず。されども智もあひ。ひづれ。十里の外ふと審り
まえど。唯牆の外や。物をみよとぞ。しまく耳目を擇ふる所へとぞ。も
られをあるふよし。されば。聖王へ俊德を明ふと。凡君くるべの姪
憎あれば。有職のりの職を捨て。婦ひ下ふ阿る。りのし。阿れりのよ過あれ
が。もし。好じふなれば。その君咎らば。君まづ法を犯して後ふ臣も又法犯
犯。僕人時をあると。まえう。夫々の如く。して。もの國亡びざるは。彼
堯舜へ聖人。されども身ひとうそ。二十度のみと。ひせど。國の興る
と滅う。賢を重く用ふれと。僕をあく愛ふると。但との二つの外伏せど。
ちのよくあん身もあるひう。し。松壽へ漢の陣平ふ。彼えま。宰相
の才あり。紀平治へ樊噲ふ。周勃を兼。勇ありて忠義篤。きじく大將
軍ふ。任ざぐ。鶴龜へ孝子。夫孝へ百行の本。國司と。なまく。バ。召政
ゆうん。あん身才あり。智あり。といふとも。その好じふ泥。そ。こくよの人
と疎く。う。ば。名教竟ふ。立ぐ。し。つれ弱官のむじよう。う馬を好ふそ
ぎえ。学問せど。今武伎をりて。文体ふ。比人。せよ射藝と説きの強う。とりそ
終より。もあり。ア。この武ふ疎き。りの。憶脱なり。大約武器へ。その主よ。
相應そ。う。可と稱。只顧勇ふ。夸ふ。とて。力よ。及ばぬ。長劔を好み。

或へ重に昌足を鎧ひ敵の耳目を驚かんとて臂もも稱り。強弓と
弯りのべ戦場の効と自在なべ。あくまく命を隕ととめり。朝縦角
のむじより。強弓を好み。自然の膂力ふ令へば。あくまく保元の敗
軍ふ。囚徒となりとて信西が計ひて腕の筋を拔れ。うば矢束と弯
てじやも苏且。ちくす既ふ衰へて。弓も又分々減せ。一弓勢へ衰
へ。物を徹と。徹」ゆき。弓の強たと弱きよく。射るのみを煉
か。宣すれど八幡殿へ弱弓と好みの人と。う勢天下ふ敵うるし。
されば國を治るも。このあらせがゆることあらん。國君強たと好とて。そ
民窮と。民窮そればその國ちふ。民の強かと弱くとて。國の強たと弱れ
ふ。あくまに賞四詞。進退の度よ稱ひて。万民德を慕ふ。あり。よくく
あくまうぬまぐ。との分えしきとほ。と競示。またの宝劍と年暮
て。あられ。うとうと。生て。まほう。舜天丸ふ附属。う。次の日より。ゆく
一室ふ。ひきも。修ア。七日奇。まへ紀平治松壽。鶴あくまと。亀林太夫
も。ちや。支の弦を傳へて。浦添へ推く。は。八頭山の供を。ぞ。教ひ。くる。かくて
その日ふ。ゆりみければ。弓羽へ腹巻。よ。弓矢。あきの狩衣。て。金剛の太刀
を佩。と。白馬。よ跨て。遂。よ。八頭山。み。教。た。まへ。舜天丸。ハ。洋衣の上。よ。あ。弓
の太刀と。佩。松壽。紀平治。鶴。亀。林。を。ま。り。あ。とも。に。こ。み。歩。行。う。そ
れ。ゆく。既。小。鞍。み。も。あ。り。し。べ。乃。弓。ハ。馬。う。り。下。り。て。後。者。と。強。し。ぐ。め
舜天丸。紀平治。松壽。鶴。亀。林。を。ま。の。こ。と。お。て。や。巔。よ。鶴。登。す。り。と。これ。が
長。鬚。白。眉。の。仙。公。頭。ハ。巔。じ。て。身。み。半。あ。れ。が。白。羽。丹。頂。の。鶴。ふ。臂。伏
り。して。巔。の。上。ふ。せ。し。だ。り。と。あ。る。弓。主。後。これ。を。と。そ。向。し。前。そ。舞。し
あ。ま。べ。仙。翁。ハ。羽。扇。と。玩。て。為。朝。親。子。と。さ。招。く。に。あ。翁。ハ。香。灰。燒。く。

徐々やふ。すくより。某浮浪の身なれども。義みはてこの國の賊乱が暫
半げへ。全く神仙の冥助ふよゆり。加以舜天丸よ。ぬくび會しるへ
て。故び迹も盡へがに。願く道号とあじる人と宣へば舜天丸
紀半治と。りうともよ額づて。再生の恩父稟みぐ。報ひをも。みは
みうしが。もうくぼも道顕を。ぬくび拜しも。幸いとも甚す。と懲懲
ふ演きへ。松壽鶴龜林をまふ。ふくらむ。さう。そのときせんめう。
立ふる。およち對ひ。やさん八郎。それへ是源家。お舊ん好あり。亦只
御家のこゆうだ。神代よりして日の奉ふ好あれりのなり。しまる。その
縁故をりうん。それへとの園開闢の祖天孫氏の父ふて。世ふ天孫と稱せ
らる。彼阿摩美々といひの。されば天地み逍遙。到れるふ名を異
む。海ふあつて。海神と稱せられ。園も在て。刃真物又唐山。おづれ
也。

日へ南極老人と唱られ。世俗へ福祿壽仙と稱そ。これを南極と唱るよ
を。流求へ南海の陬南の極なる老人也。もうあみ後世好事のりの南極
星よ配へたり。又大日本おれ武彦の神名川伊豆の石郎お勝を控へて。
その地お勝又長鶴村の名を遺し。或ハ忽魯日謨斯祖法兒ホの夷秋の園
ふて愛せ。鹿を世ふ福鹿と唱へり。又有とてハ赤卯洞のほく
ふゆねび。その地をやがて福祿と名るよし。書藉よ載へ。志ウ野
唐山隨のサふ。サぶ姓を謬傳。歡斯名を氏と記し。渴刺兜を名とする
セ。又。この国人も妣アを受て。わ此ころ御るの多う。歡斯名
上代。所云君長のゆはして。後世王子とさんぞと唱へ。間切の領主を
按司とり。歎斯為の將語。この園開けそらへと。一男一女化生
され。その男の神ハアれゆれば。つれか二男二女あり。彦火火出見尊。

鉤を求めてこの國へ來させ」とて長女尹君へ尊にもりられてまう。豊玉姫と云れつ。遂ふ孕ることありて鷗鷺竹荀不合尊と産をもる。ふく處るとありて日本より脱てゆりしふ二女祝を進して。皇子を養育をされば王依姫と云れ。あの因縁よりが嫡男よ天孫の姓乞賜り。世ふ天孫氏と稱せば。さればつる流求ハ神の代より大八洲の属國として種嶋と唱る。すへ度火出見の島の浦をつる女児の腹か宿せ。故ふ名とも。あくねふ後の人へまよ。種嶋より私生して流求へ往還。そればその地よりて天地と齊くし迹を巴麻鳴ふどじりども。八宏よ徳行して。春命从天地と齊くし迹を巴麻鳴ふどじりども。あやく日本ふ往還をされば康平六年春のとろ。つる愛する鶴放れ。そ。陸奥みむびとて。春のとろ。あきまきづけ。さ。陸奥みむびとて。春のとろ。傷られて。あくさく人よ獲れ。

時ふ源頼義朝臣鎌守府の右軍にて奥列又在任。そ頼義の嫡男八幡太郎義家前九年の合戦ふ討れ。すれど敵味方の苦戦の矢。あやく足ふ金の牌を乞。放生會行はしうが。つる鷺も又その中にありて巴麻鳴へなり。すれど。これ我家の心操と感。あまり後まで件の金の牌を乞。かくて又九八年の月日と。近衛院の久壽元年。つる鷺あらび東遊して木綿山よりして。震靈玉塔にて。金の牌を樹。杪かくと。命も既に危うじて。乃朝お助られ巴麻鳴へなり。すれど。義家の軒祖孫二代の恩惠を囁く。感佩せ。つる鷺ひきぬき。さう終ふ八郎。君父の仰黙止がにして。放せず。鷺と捕獲する。潛ゆくゆくの國。さうして。あらわ忠孝の志の戀。さふ鷺と。王女の配所を遣す。輒くこれを為朝に獲さ。そのうち大嶋の縉居を訪す。

詩を贈アテ慰め更ハ未嶋ニ影向シ。二郎の長女が自殺アリ。夢有
ナリ。アリハアレナリ。アリハアリ。ソニ恩アリ。報モ足アレバ姑巴
游モテ舜天丸が必死を救ヒテ源家の重宝。兵学の秘書が傳授し。
遂ニ親子を擁護シテ。暁雲を解ス亡ニシテ。されば舜天丸世ニ生キ。
暁雲が幻術行レド。彼子の箭弓が引カレハ。護れのみナリ。天照
天照白王太神。八幡太神。阿蘇明神。讚岐の金毘羅。崇徳院の神靈
白旗の上ニ出現シ。軍威を祐ス。その神徳又名アリ。さても流求
流求ハ神代ニ海宮と唱へ人の世となリ。その後ハこれを南倭と唱へス。
されば唐山の史ニどに倭と稱されども大日本の國史ナリ。とね
まもこれ南倭のてと西して。流求と斥てりふのニ。又多觀國とも。多尼島
モ。也。被攻トモ。奇界ニモ唱シ。奇界乃奇怪也。どの國奇怪のニ多
く。後ハ鬼界と書みナリ。鬼が嶋とも唱フメ。ミナ南嶋の總名ナリ。
今まぐてり琉球也。史ニ漏ル。且くつて。推古天皇の廿四年夏五月。
夜旬七口未之秋七月亦被攻未之夜旬といひ。被攻トモ。ミナ南嶋
のニナリ。かくて天武天皇のちん附ニ倭馬飼造連等。多祢嶋ニ使
サリ。二十一年とまうに秋仲の連ホ國人をねて。地の圖ハ献シ。
多祢嶋所謂流求也。さて元明天皇の和銅六年ナ及ヒ。南島の
諸嶋内附ス。これより十餘年前。文忌す博士譯語諸田。多祢國
ヘ使セ。そのち文忌す博士ホ。とくべて八人兵をねてこの地へ赴た。よく慰
撫シ。その明年。多祢被攻。奄美度感人ホ。博士ホ。隨ヒ事。方物
を獻ス。位を授。祿を賜ス。とちのく差あり。これハ文武天皇の三年の
事なり。のち又三年移て。多祢人ホ。命ふたがふとあひて。島を遣て。

悉く伐平け校戸^スにて夷を置ぬ。これハ大宝年中のとくとぞが見える。
さふりふ奄^ス安^ミアマ^ミ。と^スリマ^ミ。このも^ス太宰府^スお詔^スして位を南嶋の人ふ授^ス。祿を賜^スて差あり。是へ
慶雲四年のとく後亦南嶋奄美信覺球美^スホ五十二人大朝臣遠建治^ス
薩^スひ方物^スを獻^ス。これハ元明天皇の和銅四年のとく。さふりふ信覺
ト^ス即今^スの八重山^ス。球美^ス今^スの久米嶋^ス。後七年^スして位を南嶋^スお詔^ス
あふて。凡^ス三百三十二人^ス。も^ス差^ス。これハ元正天皇の養老四年のこと
なり。後又七年^ス母^ス南嶋人百十二人^ス来朝^ス。叔佐^スせんすう^スと。も^ス差^ス
ア。これハ聖武天皇の神龜四年のとく。後七年^スして太宰大貳^ス
小野朝臣^ス。高階連牛^ス養^スと遣^ス。石を南嶋^スお植^ス。その地名の
ゆゑ。りきうきとまつる。おととく。とくとく。ある所里數及泊船の水を取^ス所と誌^ス。これハ天平七年のこと。

後亦九年にして太宰府^スお詔^ス。重て南嶋をみも^ス。被^ス建^ス一^スひ^ス。これハ
孝謙天皇の天平勝宝六年のとく。されば當初流求の諸島^ス。
大隅^ス隸^スして能満益赦^スの二郡^スとし^ス。文武の天宝年中^ス。
現^ス小日本^スの部内^ス。伊豆の七嶋^スふ異^スふだ。されハ類聚國史第百
九十卷風俗の部^ス。國模^ス和隼人^ス。隅多^ス祢^ス。南嶋^ス。拔^ス攻^ス人^スと并^ス出^ス。
殊俗の部^スへへ入^スれど。嵯峨天皇の弘仁元年秋八月癸巳僧良勝^ス
多^ス勧^ス島^スへ流^ス。女と同車^ス。故に又近属法勝寺の僧都俊寛^ス。
鬼界^スへ配^スされ^ス。平家を傾^スんとせ^ス。故に多^ス勧^スといひ鬼界^ス。南嶋
の總名なるよし前^ス述^スて審^ス。以^スあるう。孝謙天皇の天平七年五月
廿三日の格^ス。多^ス勧^ス嶋^スの郡^ス。おひ先例^ス依^スと^ス。伏聽^ス。に惜む^ス。淳和
天皇の天長元年秋九月戊申。太宰大貳^ス後四位下。小野朝臣峯守^ス。

多穂嶋の
大隅國不
隸を停へ
と請ふ小野
峯守が奏
言ハ日本
後紀卷ノ
十又三代
冥緑巻
二十八
又をう

議して偶多穂島ハ南のシテ海中小居て人兵弱し。國家ゆうて扞城
ふあらじ。又嶋司が一年の給物ハ稻三万六千餘束。准モ貢調ハ鹿
の皮一百餘皮更別物。名ありて實なき。損失して益少く。とまう世
うば。遂多穂島を捨られ。こればりして天朝へ至り。胡越の心
をすそとりとも。今こそあれ。後も亦必也。日本ノ属國となり。故
いふもとなれば。この國大古の附もしてハ彦火火出見の恩澤を被す。今
亦八郎の武徳。活き。因を宣して恩がち。ハ禽獸みども芳生す。
孰クその本を高ぶれ。あれども八郎ハ蓋世の義士。それば生を貪フ榮利
よ走る。君父の仇を報ざるを恨と。君父の仇を忘れざる。あの國すハ田
そべく。志うれば。こくふ玉うりのハ舜天丸の外。誰うあぐん。あびや
今大日本少。八郎の兄義朝の子前兵衛佐頼朝。蛭が小嶋。小嶋。義兵を揚
そ。平家と西海を討滅す。日本國の總追補使小補せられて位階二位。不
昇進す。おへ鎌倉をゆうがづ。六十餘國を管領せり。あれどもこの人
の子孫。少く弟。人。子。も。が。不。天。下。の。位。を。北。條。が。不。も。あ。れ
ど。北條が武運場を。不。及。び。て。為。朝。の。子。孫。下。毛。と。起。て。日本國の
武将と仰。され。十。餘。代。ハ。相。続。せん。秋。志。と。ハ。郎。何。を。う。恨。ん。迹。と。ハ。丈。の
来。嶋。よ。と。不。も。で。瀬。州。白。峯。及。象。頭。山。ふ。神。を。か。よ。し。て。神。威。を。後。世。す
なり。と。と。ゆ。う。と。促。せ。ば。乃。朝。ハ。こ。れ。を。ゆ。く。快。げ。不。うち。矣。と。頼。朝
孤弱の流人として。小賢。と。も。義。兵。を。起。て。清。盛。の。氏。族。を。討。も。剷。せ
武運の高さよ。叔父。と。遙。年。上。たり。と。君父の仇人。滅。く。と。れ。亦



誰を讐とし。撃べた速ふ故國へゆき。而て。讚岐院の山陵も。肚を切るの
外色と辞をもみし奉と捺り。いつても身を起してまへ福祿壽仙尊余
として。八郎の忠孝信義へ乾坤ふ通じ。鬼神ふ合一。永として道を絶され
死をといふ。も滅うてと静く。生アとつとも神よ脅。帰國の准体ハ舟車
に及づ。讚岐院のむん迎もや。近げまわと告もあく。ふ紫雲霞謹ヒ
て東のきより天引つ。雲の中みれ爲朝の才源九郎。爲仲白縫姫りもす
ふ。保元の合戦小討死せし前先拂の須藤九郎。遙間計惡七別當。手取
の與二同。与三打手の紀ハ大矢の新三郎。越矢の源太。吉田の兵衛。松浦
の二郎。左中太を首とし。十七騎の勇士を以て爲仲真先ふ馬牽向。終
て久々や舍兄の君去く。年の十月。ふ。讚岐院の仰と稟。佳奇呂麻人ふ
火急を告。林太夫トてあん身夫婦を放せー。のハ。かくすもうひ乃仲。今ハ

そや。つぶ君も父も行つてゐるゝあとありのと呼びかけられ爲朝を
欣然と立ひうひきにわゆれ忽地。雲ふうん衆くれ件の馬ふうち
騎えべ爲仲。白纏左右より。轡を楚と取る。これを又う舞天たを。あちも
あづれぞさし招へ。嚴君ちじけえ。こひ母君も情みしき。が身ひと門を
とる。
笛あきてゆりゆかひ形ひしはひきと叫びまへ紀平治へりうどもにま
を抗声をかり立て。盡ぬ名残そ惜う。松寿鷹。亀林太夫おも亦只覗の
母ふ別と猿の抄よとあづく。われよくとぞうふ招くかしなき
天の原。あづけられハ八重雲の霞よまざれてええをなづく。

第六十八回

ちくさん あ
中山府 も舜天佐 不 即
まつ ぐ そく ざい
神之祭々 樂を奏々と 大團圓

もてまう。ちくら
舜天丸は母ふ別れたり。汎瀬ひよど乾きぬふ今亦父ふ捨へ

り。汎渢ひまご乾きがふ。今亦父ふ捨られて。哀傷

琉球ニ異
人をはじて
壽の字を
りて姓と
する者ハ
檜窓茶
階又本
フ

まもとくするかとな。轉輾つてあくづれまへ紀平治。松寿、鶴、亀、ホウ、尉四物
かみてせんそぐあふ。福禄壽仙これをうて、舜天丸ふくくな歎たまひそ。
孝子ハ良めども生を滅せしと名を揚。親を顯そん。則孝の修りをと。
松寿紀平治ホヘ。もや舜天丸ふ俱して立つて。國の大ゆと漠見し。
これ亦えぐ福せん。祭祀ある毎よ。づが肖像を造りて拜林み立。
又え三ふ。づが像を畫れて壁ふ貼る。その家きて、福ホト人され、國王
一代毎よ。國ふ異人を誕生す。これづが再誕。す。研形容の背。す。成
こそこれをあれ。り。民間ふ誕生せば。宮中ふ養ひとて。禍福吉凶を問
とあくべ。響音の物。す。も。す。と。そ。の。り。の。究。め。て。聰明。す。て。女色。す。近
つこと。あく。只壽の字。と。り。姓。ふ。賜。く。まほい。と。喻。を。き。と。あれど。
あまく。ふ。天機。を。漏。づ。却。國。ふ。禍。め。ぐん。努。情。じ。と。い。ひ。う。と。忽。地
えき。ぎふ。え。そ。ホ。コ。ま。ひ。も。も。ま。

封戸を増加へ大は倉廩を閑じて國民を賑給す。されば國中の良賤老弱へ為朝の升仙へまづはしを傳へて。魚鱉の水をもみれり。如く額とめらちてうち歎たまふ俄頃よ舜天位ふ即て。この善政を行はば。海月の骨みあふこゝもして。鉢と限りなく。えみ謡ふ声市も満ぬ。さる程よ舜天王へ諸の功臣と會日へて宣す。夫虬龍ハ國の寇もあるふその珠をりて。金とせんとあうれべく。瓈と球との兩顆の珠ハ玉城の東岳も瘞て。ちの餘殃をはら。今より真鶴の宝劍と。彼金の牌と。傳國の神器に。承く子孫が遺さんと。おかれいふと。同くまへば。衆皆あうべと回答。かがまづそひゆびいそじ。もじとして。次の年の春より中山せら。七星山の北のさと安里橋のほとり。小宮柱もしく建て。仙傳の征者す。天孫廟を再興し。又浪上の社洋の社戸棄那の社。普天間の社。末吉の社。天神を建立て。熊野の神を奇ひ祀。阿蘇明神。崇德天皇。稻荷天満天神を併奉り。舜天王。壽星。老上。達葉の神を割て。松寿。嫁男。高滿。おとべて里之子の年少なりのふ教てこれを習ひ。諸神の祭祀。必との樂を奏させ。又國の大孔宗廟の祭事。又。那霸の土官。うけまつりて。手洗井の畔ふ大に。斧松一株を立。又白鶴二口を造りて。飛鳴相向ふ状のどくし。紙皮にて假山を作りて。草花を裁縫し。一の差入とされば日本画工の福祿寿を圖する。鹿と鶴を従じ。又墨小書巻がりとする。あの仙翁。舜天丸へ兵書を傳授。もとを表せり。又

明神の神体にして。社の相殿。これを安里の八幡宮と号す。又灵嶽。天孫廟を再興し。又浪上の社洋の社戸棄那の社。普天間の社。末吉の社。天神を併奉り。舜天王。壽星。老上。達葉の神を割て。松寿。嫁男。高滿。おとべて里之子の年少なりのふ教てこれを習ひ。諸神の祭祀。必との樂を奏させ。又國の大孔宗廟の祭事。又。那霸の土官。うけまつりて。手洗井の畔ふ大に。斧松一株を立。又白鶴二口を造りて。飛鳴相向ふ状のどくし。紙皮にて假山を作りて。草花を裁縫し。一の差入とされば日本画工の福祿寿を圖する。鹿と鶴を従じ。又墨小書巻がりとする。あの仙翁。舜天丸へ兵書を傳授。もとを表せり。又

琉球にて。今小年首毎ふ少女子ホガ板舞の戯といふとをもる。その光景。巨な表板を木椿の上ふ横よし両ひの下と空すうをること二三尺。もうニ女板の上小對ひ立て一起よし。一度勢ひ小就て躍起ること。五六尺よ至る。あられども傾跌欹側とほ。信。これハ為朝什仙。あて雲の中へ入りあら状を表す。又九月九日ふいする毎ふ龍潭の水。小舟をうぐて。每舟小鼓を設。綵衣しる童子。これを駆て。即ばなしせば。前後小二童子ありて。一人ハ旗を執。一人ハ鑼を擎て。鼓と相應。龍舟太平の詞と唱。武徳遠たふ及びて。毒蛇を退治し。洲民永く治平と享て。海國長ふ恩を蒙り忠を竭と説か。今小恒例とすれりとぞ。或ハいふ中葉りうきうみつ。琉球三山。よみうれて。蠻觸のあくとひ止とたまうり。比諸神社頽破。より々教を尚泰王の時。八幡宮を再興し。尚元王のとき林太夫が子孫

三
極
天
地
萬
物